五才児の音楽リズム

村田修子

（扱った教材のえらび方とその傾向についての反省）

幼稚園生活の中で大きい割合いを占める音楽リズムの分野については、基本的なことや、望ましいあり方などについては十分論議しつくされているし、その指導書などもたくさんに出ている。

けれど、この音楽や音楽をともなった動きは、時間的に流れてしまって、はっきりつかまえにくいものであるため、それなりに過ごさせてしまうこともできる。また、これをとりあげるにしても、本に書かれている基本的な事柄では解決されにくいことがたくさんにある。

この点は、多少どの保育内容にでもいえることであるが、前にもあげたように、時間的・空間的な要素を多分に含んでいる内容であるだけに、教師の計画や指導が、効果をあげたり、目標に達するのにたいへん関係がある。

ここでは、教材をせばめてその一部であるうたについて今まで自分がとり上げたものについて、そのとり上げ方など改めてふりかえってみることにした。

ただ、これを考えるのに、五才のときについてだけ考えたのではとらえにくいので三才のときから五才になるまでの各年令についてみることにする。

ただし、三才の初期は、「幼稚園生活に馴れる」という大切な目標があるので、今まで家庭でうたわれていたものをとり上げて用いることが多い。こうすることによって、家庭と幼稚園を近づけ、気やすく楽しんで登園する気分を作るのにたいへん役に立つ。

この場合は、三才児に望ましい音域・調子・拍子・歌詩の長さ、などということよりも、より楽しくということが主であるために、材料も種々さまざまで、たいてい高度である。たとえば（入園当時の調書による）

・一般的な童謡

おててつないで、夕焼小焼、よい子の町、めだかの学校、きゅっきゅっきゅっ、七つの子など。

・昔ばなしに関係のあるうた

桃太郎、兎と亀、浦島太郎、舌切雀、など。

以上を調べてみるとこれらは、家の人がよく知っている歌でどれも三才以前の幼児にはむずかしいように思うが、家の人の口から、教えるという意識でなく歌われるのが繰返し繰返し耳に入ることによって、たいしてむずかしいと思うことなく覚えてしまうのである。

その時期をすぎてからは、次のようにして教材を選んでいる。（大体おもに使っている本、うたとあそび、曲選集、幼稚園のための指導書、各年度夏期講習会のプリントなど）

四月の始めに、前記の本の中から取り上げたい教材を本別に抜き出して一覧表を作っておく。その中から今扱いたい題材について子どもの側では年令・今までの経験など。教材の側からは音域・歌詩の難易・長さ・音程、リズム形の難易などについて考慮した上選択する。

たとえば五才児になって、のりものあそびに関連させて、汽車とか、電車のうたを選ぶとする。先ず題材をあげてみる。

曲選集より、

1. ぶうぶうじどうしゃ（ヘ長調・二拍子・四小節）……五一頁
2. でんしゃごっこ（二長調・二拍子・十二小節・歌詩二番まで）……四三頁
3. 汽車ごっこ（ハ長調・二拍子・十六小節・歌詩三番まで）……四二頁
4. きしゃごっこ（ヘ長調・二拍子・十六小節・歌詩二番まで）……四八頁
5. 汽車ぽっぽ（ハ長調・二拍子・十六小節・歌詩二番まで）……三九頁
6. きしゃ（ヘ長調・二拍子・十六小節・曲だけ）……一〇五頁
7. きしゃ（ト長調・四拍子・十三小節・曲だけ）……一〇六頁

其の他より

8. いまは山中いまははま
9. お山の中ゆく汽車ぽっぽ
10. 汽車汽車ぽっぽ　ぽっぽ
11. つみ木の汽車が
12. のりおり　ごじゅんに
13. ぽっぽ　ぽっぽ　しゅっしゅっ　しゅ

このようにたくさん考えられるが、この中で、1. は内容がすべて三才児にちょうどよいので三才のときに使用し、5. は伴奏が汽車の走る光景を思い出させるのに適当であるし、リズムがとりやすい、ということなどでやはり三才のときに使用している。7. も二つの異なったリズムの形がとりやすいようにはっきりしているので既に使用している。

四才児のときは前年度のときのものを十分に習熟することにつとめたため、特別に新らしいものはとりあげていない。

そこで五才児のときは、歌詩にある程度内容のあるもの、という基準で 3. と 4. を考えたが、3. は音域が広く、しかも高い音が連続して使われているので、どうしても音程がさがってしまってうたいにくい。ということは、幼児の発達不十分な声帯には無理なので、4. の方をとり上げた。これは単に一例にすぎないが、こうしてとりあげたものには表にメモをしておく。このようにすることは自分のためばかりでな

く、当園のように実習生が入れ代わりたち代わり来て、それぞれの計画のもとに実習をする、というような機会の多いところでは、その計画の相談にのる場合などにも重宝である。

ただこの場合、一覧の表を作るまでの題材のえらび方に問題がないかどうか、しらべてみる必要がある。

そこで、三才のときにとり上げたものをひろい出してみる。先ずうたを伴なったものについて調子別にしてみると、

ハ長調…おうま・ひらひら蝶々・おたまじゃくし・こどもの日・こいのぼり・結んで開いて・ポンポコたぬき・もちつき・たこたこあがれ　など

二長調…たんじょう日・ぞうさん・かあかあからす・あめふり・あひる・もみじ・はと・まめまき　など

ヘ長調…ぶうぶうじどうしゃ・わたしのおくつ・赤い鳥ことり・おにさんこちら・時計屋の時計・ちゅうりっぷ・ぶらんこ・まつぼっくり・おひなさま　など

ト長調…どんぐり・おおさむこさむ　など

イ長調…春よこい

イ調陽音階…はないちもんめ・かごめ・ひらいた・ゆうやけこやけ

以上のもののほかに　曲だけのものをたくさん使うが、これは調子より、とりやすいリズム形であること、という方が問題なので省略する。

この分類からみると、子どもの発声しやすい音域をもつ調子が使われているので、この点は問題はない。

長さも大体が八小節で、その中の幾つかが十二小節・十六小節である。それも、行事に関係があって、園中でそろって歌う、というような場合のものに長いものが見出される。三才児のものとして純粋にとり上げたものは、動物・のりもの・幼児の身近かな事柄で四小節から八小節のものが大部分である。

この点も大体無難で問題はないように思うが、ただ、これらのうたは、幼稚園というところのうたにすぎず、入園前に楽しくうたわれた歌の気分で、家庭の中にまでとけ込んでいるかどうか、という点では一考を要するように思う。教師という立場からはまちがっていない、と満足しているが、反面物足らないような、何かむじゅんした気持ちになる。

次に四才になって特に目立ったことは、とり上げた題材の数が非常にたくさんになったことである。これは、三才児と四才児の成長がたいへんに違うというあらわれであると思う。ここでは歌詩のついたものだけ単に調子別に数だけをあげてみる。

ハ長調…十曲　　イ長調……一曲

ニ長調…七曲　　変ホ長調…一曲

ヘ長調…八曲　　変ロ長調…二曲

ト長調…四曲

こうしてみると歌詩のついたものは数の上では三才のときと大体同じである。ふえたのはうたのつかない曲だけのものの数が約一・五倍になっている。この点は、幼児の経験範囲が広がったことや、リズム反応が容易になったこと、新らしいものに対し

て抵抗が少なくなってきたので早く馴れるようになった。ということが考えられるが教師の側から考えると、新らしい歌を覚えさせるよりも、曲でひっぱるほうが気易いという気持がどこかに無いとはいえない。

けれど、それはそれとして、動作をする場合は結局、うた（ここでは歌詩の意味）にあわせて身体が動くのではなく、そこに流れるリズムに反応するのであるから、目標に近づくにはこの方法でもよいと思う。

五才のときのようすをふりかえってみると、四才のときは反対に、その数は少なくなっている。これは勿論、小さいときに扱ったものをより習熟するために繰り返して扱うからである。けれど新らしくとり上げたものについては、前にあげた要素に加えて、曲想もより美しく、題名にぴったりしたものであり、また、だんだんに基礎リズムを身につけてきた幼児が、自分で思ったように動作することができるような教材を多く選んだ。

次に、これの指導の場面を考えてみると幼児に対しては常に幼児をみつめながら指導する態度がより効果をあげうると思う。たとえば、うたをうたう場合、教師が楽器の方ばかり向いて、音だけが中間に流れるよりも、顔と顔を見合わせてうたったほうがどれだけいきいきとしたものが生まれてくるか分らない。

そこで、年令がすすめばすすむほどよりすぐれた曲想をもったものをと思うけれども、前にのべたように扱うのには、自分の能力でこなせるものでなければならないために、余り曲のむずかしいものは、どうしても敬遠しがちになってしまう。こうして教材をひろいあげてみると、自分の傾向を作りあげる一ばん大きい原因はやはりこれではないだろうかと思われる。

この三月卒業した子どもたちには、後半意識的に次のようなものを多く扱ってみた。

歌詩が小さな劇的要素をもったもの、たとえば、めだかの学校・赤いお花・ことりのおはなし・すずめのおやど・はなさかじいさん・ぬけたぬけた大きな大根・やぎさんゆうびん・山の音楽家　など。

これは言語を主とする劇あそびに入る前の段階として役立ったと思う。

音楽リズムにはいろいろの分野があり、それぞれについて問題はつきないが、ここでは狭く、教材としてとり上げるうたのえらび方について、実際してきたことをもとにして、自分ながらの意味づけをしたり、反省をしたものである。

堀合文子

五才児になると、いろいろの日常生活経験も豊富になる。経験の巾が広くなるにつれて幼児の活動も楽になり、巾も広くなり表現活動も豊かになり楽になってくる。

三才から、或いは四才から家庭生活の団体生活へと移行した幼児を、音楽により、たのしく遊び、その中に幼児の音楽リズムの目的を達しなければと努力してきた。その自分の組の幼児の程度により、その指導の進歩には差があるので、次の段階の指導においては、その上につまれるものは大分違うが、一応五才児にはこのような気持で、このような音楽リズムの経験を与えたいということを考えてみよう。

○自由な表現

幼児の身近なもの、幼児の好むもの、興味のあるもの、幼児の理解できるものと、幼児の生活からいろいろと取材してそれを音楽にあわせて自由に表現してもらう。この事は入園当初から一年ないし二年、自由にたのしく表現して遊んできたので、五才ともなると音楽が聞こえてくれば、ちゅうちょせずそのものの表現をして遊ぶことができる。

例えば、「小鳥になりましょう」と指示すると三十人いれば三十種の小鳥になってとんだり、話をしたり、鳴いたり、ごちそうをたべたり、枝に止まったり、遊んだりと、表現することができる。

その時、五才では、教師の指示が次々と目的を追って変化しても、下手ながら音楽にのって次々と表現していかれるようになりたい。単片的なものより、小さいが連続的な表現へということである。

また、教師が材料を与える時、常に取材の範囲が決まってしまうようでなく、取材の範囲を常に工夫し幼児に自由に表現してもらうよう考慮しなければならない。

幼児は五才ともなると、〃しよう〃〃やろう〃との意欲が旺盛になってくる。で、教師の助言ということは一層、幼児の興味を刺戟し、また幼児の意欲も誘導する。

幼児の自由なる表現も、個人個人により機会を得て賞讃することは五才児でも変らないことである。

これまでに経験してきた幼児は、表現の形とか、やり方などは勿論教師からは要求せず、だれもたのしく、よろこんで参加し、自由に表現してくれれば、としてきたが、今度は幼児の方より自発的に、表現を美しくきれいにという意慾も加わってくるので、教師もこれを機会に表現の指導という事も五才になれば考慮に入れなければならない。自由に自由に、楽しくさえあればと、ただピアノを弾いて幼児にさせるだけでは、幼稚園でやらなくてもできることで、やはりよりよく指導する事が次の段階の使命ではなかろうか。

かといって、五才児になったから今度は同じ蝶々になってもその手の動かし方を指導したり歩き方を指導して専門的に指導するのではない。それではせっかくのたのしさ、よろこびのほほえみは幼児の顔から消えてしまう。

で、その一方法は、

教師が幼児と共に動きをするということ。

今までもやってきたことだが、ピアノの所にすわってばかりいて五才だからピアノだけ弾けば自由によくやってくれるというのでなく、ある時にはレコードをかけ、幼児になって共に動いたり、教師の動きをみせることが大切で、その時こそ、教師は美しく、一流バレリーナのような動きをみせることが必要である。先生がこのところはこういうふうにするから皆もこのようにしてと言うのでなく、だまって教師は美しい表現をすればよいのである。よき教師はよきバレリーナのような動きの上手さを持たねばならない。そこから幼児は模倣するなり、ヒントを得るなりして、今度は幼児は幼児なりの自分の表現をそこから生みだしていく。これは一日の成果でなく、何回かのくりかえしがものを言うのである。

これは五才だから常にリズムのために教師が毎回くりかえすというのでなく、やはり教師がピアノを弾き自由に表現する時も必らず必要で、その度合はその幼児の表現をみながら決定すべきであろう。

次にまた方法として、既成の題材、振付けられた動作をすることも幼児の表現を豊かにしまた伸張するヒントとなる。

○振付けられた題材

昔はこの振付けられた材料を懇切に指導しリズムという既習の材料の繰返しで時間を持っていた。が戦後、その幼児の持てる表現を引出すよう、自由表現と称して、音楽により自由に表現するように変ってきた。が前にものべたように、既成のリズムは、五才児ともなると幼児の表現を助成する一つの方法、ヒントになるので、五才児になってこそ既成の振付けられた材料を豊富に与えて幼児の表現の助成にすべきであると思う。幼児はその振付けられた動きをすることにより、そこから何かヒントを得てその表現はのびていくと思う。三才四才の時は極端にいってむしろ与えなくてもよい、自由に幼児自身の表現を充分に発揮し、音楽にあわせて動きをすることをたのしむだけでよいとも言える。

一つの振付けられた動きを教える時も、ただ動きの順序を教えるだけでなく、幼児の表現を引出しながら、振付けられた動きに持っていくという教え方でないと何もならないことは今更改めて言うまでもない。

それからこの振付けられた動きの取材であるが、幼児に適切な取材が必要である。適切なということばは言うに簡単で、また常に言われることだが、実にむずかしい。教えれば、覚えてくれる幼児のため、次第次第に材料は高度になる嫌いが強い。そこで幼児が前述のように、その振付よりヒントを得、自分の表現の助成になる程度の振付が適当であると言えよう。幼児の表現より一歩上のもので、決してはるか上のものではいけない。幼児に適当なよき作品をえらぶべきである。

○リズム遊び

幼児の表現も次第に巾が広く幼児もたの

しく音楽に併せて遊べるようになってきた。

単片的な、こまぎれのような表現ではたのしさが淡くなってしまう。教師はこの遊びをより豊かにする必要がある。で幼児の環境や生活より取材してリズム遊びをすることが一つの経験と思う。いろいろのリズムを組み合わせて、一つのたのしい遊びにするので、季節に併せたり、経験を再現したりお話を表現したりして、言いかえれば、組全体の協同表現のリズム遊びとも言える。或る時は全員で筋をおって表現したり、或る時はそのパートに分れて表現して遊ぶ。

五才では、そうとうに複雑なリズム遊びを教師は取材創作して遊ぶことが、幼児にとってよりたのしいことであろう。

○基礎の指導

体を音楽によく合わせて動けるようにリズム感を正しく指導するには、やはり基礎の指導も考えられなくてはならなく、基礎指導、基礎動作として考えられてきている。

勿論、三才または四才の時より考えられなくてはならないが、前にも再三のべたように、三才または四才での基礎は日常の音楽により表現して遊ぶその動きの中に含めて考えられていたので、五才になっては、やはり、基礎の指導をとり上げて指導しなければならないと思う。勿論、〝さあ基礎動作をしましょう〟とリズムのはじめに必らず、例えば拍子感をやしなうとの主旨で全員が何分間はそのつど、それを身につけるまでくりかえしてやるというのではない。

基礎の動作も、無味感想のものでなく、幼児がたのしく、基礎動作をさせられているという感じをいだかないで、基礎動作が身につく材料や指導法を教師が考えてしなければならない。

常に考えることだが、基礎といわれて必らず教えられる項目の数々の他にも、もっと表現の基礎ということも五才になったら考えなければいけないのではないか。

例えば、強い運動、弱い運動、静かな運動、かいきんの運動などなど。また表現で、うれしい表現、悲しい表現、こわい表現、たのしい表現、などなど。

勿論、このようなことばでするのでなく前述のように幼児に適切に、あるものを取材してこの運動・表現を体でさせるので、表現は、自由にさせたり、ある時は教師の模倣でよいと思う。

一つ注意する事は、ともするとおとなの表現を取材してしまうが、その点よく注意し、将来また、自分が表現したい時、表現できる一つの表現の分析とでもいいましょうか。このようなごく簡単な表現の基礎も一般基礎に加えたらどうかと思う。

○楽器による遊び

五才児はいろいろの経験をのぞむ。そして音楽リズムには動きだけでなく、楽器による遊びもある。

これは言うまでもなく、三才、四才での基礎的な器楽の指導の上にたつもので、幼

児期に使用すべき簡易楽器を使用し、協力的にたのしく遊ぶのがよいだろう。

従来の楽器あそびのように、教師の計画の時のみ楽器がいじれるのでなく、常に幼児の遊具の一つとして、何種類か部屋に用意しておき、幼児の自発的興味を誘導する機会を持つことも五才児の器楽指導に大切だと思う。

○日常保育の中での音楽リズム

音楽リズムというと日常の生活の中では他の領域にもいろいろと関係するということは他のものと同じことで、また言うまでもないことである。

それゆえに、時間割式に今日の何時間が音楽リズムと決め、全員一室に集め、揃ってはじめる。これも、決して悪いわけはない。一方団体的行動の面からみれば決して悪いとは言えないが、五才になったら、或る時は幼児の生活の中より音楽リズムへ誘導していってはいかがでしょう。また何日の何時と決りがあり教師の計画ならば、呼笛を吹いたように全員あつめて音楽リズムをはじめないで、教師の手腕によって自然に誘導する法で、本当に音楽リズムをやりたい人のみ集ってやるという時も、時にはあってもよいのではないでしょうか。結果の体形・状態は、同じになるかもしれないし、ならないかもしれません。同じになれば大成功ですね。

或る時は幼児がレコードをかけて自分たちでおどって遊ぶ。或る時は楽隊ごっこがはじまり教師もその仲間に入って遊ぶ。或る時は歌をうたいはじめたので教師はそっと立ってピアノをあわせてあげる。

このように音楽リズムの中にも幾場面もあるが、すべて、幼児の生活の中へ音楽リズムが入りこみ、よりたのしく、より工夫され、そしてそこに教師の指導もありとなると、どんなにか音楽リズムもたのしいものになるでしょう。

幼児の生活に結びついてこそ、幼児期の音楽リズムの目的ではないでしょうか。

×××　×××　×××

音楽リズムとは、動きばかりでなく、動きより鑑賞まで細かく分類され、それぞれ五才児として、五才児にしたい指導がいろいろある。以上列挙したのは、その中の特に五才児として考慮すべき事で、勿論三才四才からの音楽リズム指導は繰り返しなされ、音楽リズムのすべての類に指導をかたむけることは言うまでもない。

年少の音楽リズムの上に五才児の音楽リズムを重ねていくので、自分の組の五才児の発達程度をよく観察し、教師の適当な判断と指導で、将来、幼児の創作への道の下地をつくるように、そして常に幼児がよろこび、たのしんで経験するようにしたいものである。

※　※　※　※